

平成29年8月24日

国土交通大臣 石井啓一 様
国土交通省九州地方整備局長 増田博行 様
国土交通省立野ダム工事事務所長 鶴木和博 様

立野ダムによらない自然と生活を守る会 代表 中島康
ダムによらない治水・利水を考える県議の会 代表 西 聖一
立野ダムによらない白川の治水を考える熊本市議の会 代表 田上辰也
代表連絡先 熊本市西区島崎4丁目5-13 中島康
電話 090-2505-3880

「白川復旧・復興対策現地見学会」等で立野ダム に関して説明責任を果たすことを求める要請書

7月の福岡県朝倉市周辺での豪雨では多くの土砂崩れが発生し、少なくとも36万 m^3 の流木が支流の橋などに引っかかり、川をふさいで濁流があふれ、被害を拡大しました（日本経済新聞2017年7月14日参照）。ところが、立野ダムで計画されている流木捕捉施設は、約1万 m^3 の流木にしか対処することができません。

5年前の九州北部豪雨で、阿蘇カルデラ内では400か所以上の土砂崩れが発生しました。阿蘇カルデラ内（立野ダムの集水面積：383 km^2 ）の土砂災害等で発生した流木は、全て立野ダム建設予定地を通り白川を流下します。想像を絶する量の流木や岩石、土砂などが立野ダム本体予定地を流れ下ったのですが、その量を国土交通省は把握していません。もしその時、立野ダムが建設されていたなら、幅5mしかなく、穴の上流がスクリーンでおおわれた立野ダムの穴はたちまち流木などでふさがり、洪水をため込むだけの非常に危険な状態になっていたのは明らかです。

昨年夏に国土交通省が設置した技術委員会は、同省の「立野ダム建設は技術的に可能」との見解をそのまま認めてしまいました。しかし、地震後の立野峡谷の状況を見るとダムを建設するには地盤があまりにも悪すぎます。また、ダム湖の下まで降りていく道路がつくれないうので、斜面崩壊対策工事を行うこともできず、ダムに水がたまれば大規模な湛水地すべりが発生するのは明らかです。立野ダムは機能しないばかりか、大雨などでダムに水がたまった状態で斜面の崩壊があった場合、ダムの水があふれて大惨事になるなど危険であることは明らかです。

国土交通省立野ダム工事事務所がホームページで6月30日に公表した、「立野ダムの洪水調節」（CG動画）は、これまで住民が質問してきた点についての回答となっていません。また、これまでの同省の主張と食い違っている点もあります。そこで、「立野ダムの洪水調節」等に関し、9項目について公開質問状を7月25日に提出しました。

7月29日、国土交通省主催の「白川復旧・復興対策現地見学会」では、事前に提出していた公開質問状への回答は一切なく、その場での質問に対しても「ホームページを見るように」と繰り返すばかりで、驚きました。住民からの質問に答えずに、何のための見学会なのでしょう。結局、「時間が押している」との理由で、参加者からの質問は途中で打ち切られました。

また、見学会の開催が、一般の人は国土交通省立野ダム工事事務所のホームページを開かないとわからないのも問題です。白川流域に住む住民の大半は、どこに、何のためにダムがつくられるのか、知ることすらできません。このまま立野ダムが建設されたなら、将来に大きな禍根を残すのは必至です。

昨年の熊本地震とその後の増水で、立野ダムの本体工事をするために白川の流れをバイパスさせる「仮排水路トンネル」は、長さ 500m のうち上流側の約半分が流木や岩石、土砂等で埋まったままの状態です。ようやく復旧した工事用仮設道路も、今年7月上旬の増水でまた流失してしまいました。今後、ダム本体工事に着手するには、流失した仮設道路の復旧、半分うずまった仮排水路トンネルの復旧の方策の検討、仮排水路トンネルの復旧工事、白川の仮締切工事などが必要です。とても今年度に立野ダム本体工事に着手することは不可能です。

そこで、下記4点について強く要請します。

記

1. 白川流域の市町村ごと、熊本市にあっては白川沿いの中学校区ごとに立野ダム事業に関する説明会を開催すること。その際、住民の質問については真摯に回答し、住民の意見を十分に聞くこと。
2. これまでに提出した6通の公開質問状の項目ごとに、きちんとした回答を行うこと。「白川復旧・復興対策現地見学会」では、住民の質問にきちんと回答すること。
3. 昨年7月～8月の「立野ダム建設に係る技術委員会」で、十分な説明がなされておらず、十分な検討もできておらず、資料が現実と違う点もあるので、技術委員会の検討をやり直すこと。
4. 立野ダム本体工事には着手せず、白川の河川改修や熊本地震の復興を優先して進めること。

以上